

<進路指導>

自己理解と自己表現を育成する進路指導の工夫 — ホームルーム活動における進路個票と模擬面接を通して (第3学年) —

県立那覇西高等学校教諭 高原 寿 仁

I テーマ設定の理由

高校における進路指導の目標は、「目的意識をもち、自らの進路を主体的に選択・決定できる生徒の育成を図る」ことにある。平成13年度の学校基本調査によると、本県の高等学校新規卒業者のうち、大学進学率・専修学校進学率・就職率の合計は、全体のおよそ67.5%である。この数字は、全国の81%に比べ著しく低い。これは、目的意識の希薄さや意思決定を先へ延ばそうとする、高校生を抱える問題状況の現われと考えられる。この状況に対し学校には、目的意識を高め、進路を早期に決定させる取組みが求められている。

これからの進路指導には、生徒たちの適性に合った望ましい将来設計が立てられているのか、その準備はどこまで進んでいるのか、生徒自身だけでなく、教師や保護者が認識することが必要である。さらに、生徒各自の将来設計・意識を生徒自身の言葉で第三者に伝えられるよう指導していくことが大切である。多くの企業や大学・短大が入社試験や入学試験において、面接試験や小論文試験などを導入している

も、学力試験だけでは見えてこない受験生の職業観や人生観等の人物像を評価するためである。

これまでの進路指導を生徒の自己理解に反映できれば、面接や小論文では生徒自身による自己表現が十分なものになると考える。しかし、実際の面接・小論文指導は2学期以降に集中するため、そこで発見された自己理解の不足や表現力の未熟さという課題は、時期的に取り返すことが難しくなるのである。

そこで、3学年の初めから、面接練習・小論文指導を取り入れることで、自己理解の不足と表現力の未熟さを見つけ出し、各自で対策を立てる時間を作ることを考えた。

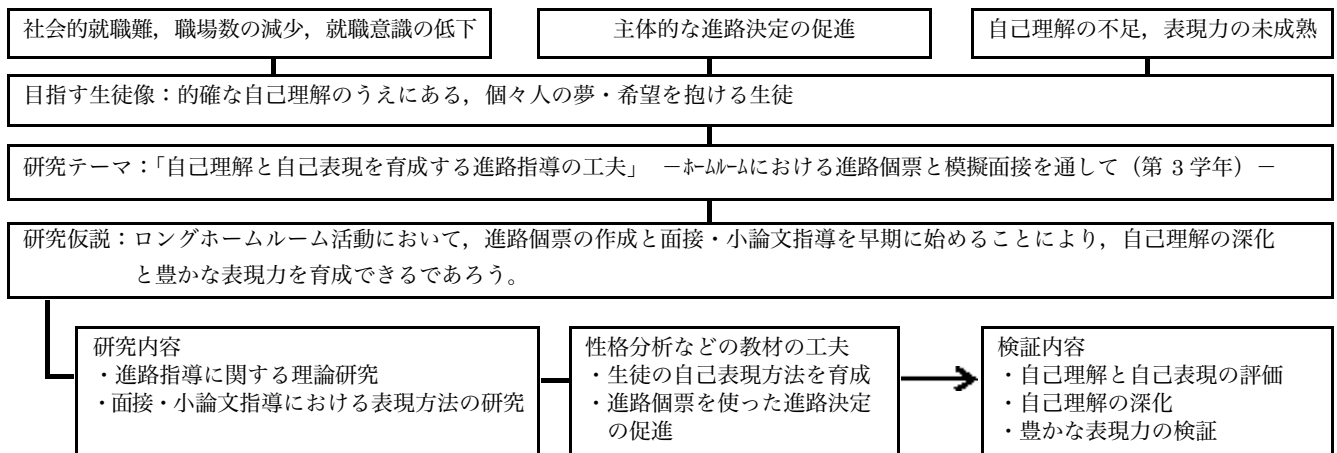
課題解決の手立てとして、生徒の進路希望と希望を達成していくためのプロセスが確認できる進路個票を作成させ、そのデータを基に面接・小論文練習を実施する。教師が生徒の自己研鑽や自己理解、自分らしさの表現等を育む状況を与えることで、生徒の目的意識を高揚させたい。

これまでの学習経験、経過を第3学年で再確認させることで、生徒の自己理解を深め、豊かな表現力が育てられるであろうと考え本テーマを設定した。

II 研究内容

1 全体構想図

課題と研究の項目を挙げ、検証の計画を構図により図示した。



2 自己理解について

進路指導において、教師が一人一人の生徒の能力や適性をはじめ、生徒の諸特性を的確に把握することが指導上重要なことである。また、個々の生徒が自分の進路を選択・決定するに当たっては、自らの諸特性を十分に理解する必要がある。

進路指導は、生徒たちに「どう生きたいのか、そのために何を学ぶのか」を考えさせ、選択させるということであるが、そのためには教師が生徒を理解し、それを生徒の自己理解につなげていく指導が必要である。そのためには教師による「生徒理解」と、生徒自身による「自己理解」を、生徒個人の総合的な理解として捉え、生徒と教師が共同で理解を深めていく必要がある。

特にLHR活動において他者理解を進めることは、第三者からの客観的な視点で見た自分を理解することにつながる、つまり主客融合の自己理解を図ることが可能になると考える。

3 自己理解のための資料

(1) 進路個票

学習の記録、諸調査・検査の記録、行動の記録など、個人カードにして整理し活用する。

(2) 志願理由書

大学受験や就職試験に際して提出するもので、本人の志望理由や経歴などを記入する。志願理由書は生徒各自が各自の特性を理解していなければ書けないものであり、「書く」という作業は、形のない生徒一人一人の考えに形を与えていく作業となる。

(3) 資料の活用方法について

生徒の自己理解を促し、教師の生徒理解を図る上で必要となってくるのが、生徒を多面的に捉えるための資料づくりである。資料は、系統的・計画的に作成され、継続して観察できるように工夫されるべきである。また、個性や特性に加え学習成績の記録などを添付することで、進路の選択・決定に十分な指導・援助が可能になる。

4 自己表現について

(1) 基本的な表現方法の研究

小論文指導においては、内容指導にも十分配慮しなければならないが、基礎力不足の生徒には、基本的な作文指導が予想される。文章の読み手が誰であるかを想定した分かりやすい文章を書ける指導を心がけなければならない。

読み手を想定するという作文の原則がそのまま面接時の対応の仕方、志願理由書に反映し、自己理解を図る小論文において活用できることを理解させたい。また志願理由書の作成自体が、面接・小論文対

策の大切な土台となることを理解させ、指導していくことが大切である。

(2) 面接で問われる表現の研究

一般的に面接での評価は、学力試験や評定平均値などに現れない「人物評価」に重点が置かれている。面接の質問集などのデータからは、面接官と受験生の受け答え以外に様々な判断基準があることが分かる。

例えば、服装や入退室のマナーなどである。それらの間接的な「人物」評価のための判断基準を知ること、自分を客観的に分析し、表現方法を工夫できるよう指導する。面接質疑応答以外の「人物評価」の基準としては、服装（高校生らしいか）や態度、言葉遣いなどが挙げられる。

(3) 小論文指導・面接指導のマニュアル作成

小論文の指導に関しては、生徒の創造性や論理的思考力を伸ばす上で有効であるとして、進学・就職における対策以外にも、学校の国語の時間や社会の時間に取り上げている学校も多い。

一般的には小論文添削後に個人面談の形で指導が行なわれる。しかし、添削指導に関しては、一人の教諭が指導できる生徒の数に限りがあるため、担任を中心とした全職員が指導にあたるような工夫が必要となる。

面接の指導においても、実際は進学先、就職先によって異なる受験の形態に対応しなければならない。そこで、小論文指導及び面接指導において、できる限り共通の指導内容が保てるように、各評価方法の中から、全教諭が指導に対応できる項目を抽出し、チェックリストを作成し、効果的指導を行う。

III 指導の実際

実際の指導に入る前に、アンケートにより生徒たちの実態を調査し、具体的な指導目標を立てるために年間計画を立てる。その中で、研修期間中に行う指導計画を立てる。

1 アンケートによる生徒の実態調査と分析

2種類の進路アンケート、「進路学習診断表」と「進路成熟尺度」を用意し、生徒の進路意識の変容を検証するために使用する。また、生徒たちが自己理解や自己表現においてどのような課題を持っているのかを確認し、指導の過程において新たな課題の発見につながるよう工夫する。

(1) 第1回アンケート調査から分かること

次の表1に示す4つの項目に関する集計から生徒の実態を考察する。

表1 「進路学習診断表」

質問項目	ほとんど当てはまらない				
	5点	4点	3点	2点	1点
1 将来の夢をもっている	27	30	27	12	3
2 自己の持ち味を発揮できる	21	33	36	9	0
3 自分がどのような仕事に向いているのかよく説明できる	18	21	30	21	6
4 上級学校や制度や種類や内容をよく知っている	0	9	51	27	12

5点：非常によく当てはまる

4点：よく当てはまる

3点：まあまあ当てはまる

2点：あまり当てはまらない

1点：ほとんど当てはまらない

得点は「当てはまる」割合が高ければ点数も高くなる。表内の数字は回答者のパーセンテージである。

質問1からは、5点、4点を付けた生徒が全体の57%、3点まで含めると84%にもものぼる。ほとんどの生徒が将来の夢をしっかりと持っているといえるだろう。また、問2、問3の質問より、各自の表現力においても自信を持っていることがうかがえる。しかし、進路情報など具体的な内容に関しては、質問4からもわかるように、およそ90%の生徒が不安を感じていることが予想される。

(2) 生徒の実態

以上のことから、生徒が今後、進路学習を進めていく上で各自の情報量の不足を克服していかなければならない状況が予測される。その結果、自己理解が十分であったか、表現力に未熟な点はないか、学習計画に無理はないかなどの課題をこれからの指導過程で発見していく工夫が必要となる。

(3) 指導の全体計画

月日	題 材	指 導 内 容	活 動 目 標
4/20	アンケート作成	進路学習診断表、進路成熟尺度	アンケートを通して、自己理解と他者理解を進める
5/12	アンケート集計とファイル配布	資料のファイリング	進学・就職指導に関する個票の必要性を確認
5/15	第1回検証授業	「性格分析と進路個票作成」	他者理解と自己理解と進路個票作成開始
5/29	自己開示のためのレクリエーション	レクを用いて学級の雰囲気作り	仲間との信頼関係を構築し自己理解を深める
6/05	第2回検証授業 「模擬面接」	学級レク、模擬面接、面接の反省	良い面接とは何かについて考える
6/12	学習内容の確認	模擬面接の反省と小論文指導	配布資料を用いての志願理由書の記入方
6/15	志願理由書提出	志願理由書の提出、添削指導	配布資料の文章例で自己添削を行う
6/29	ファイリングの指導	進路個票の整理	過去の資料がファイルに活かされているか確認させる
7/10	第3回検証授業（研究授業）	「模擬面接と面接について」	模擬面接の反省と面接における表現方法について（講演）
7/17	学習計画発表とアンケート実施	授業を振り返っての反省等	自己理解の深化を振り返り、計画を立てさせる

2 指導の経過

生徒に作成させる予定であった進路個票は、資料が多くなることが予想された時点で、進路資料用ファイル作成として指導方法を転換した。

ここでは、いくつかの資料を例示し、使用方法を紹介する。

表2 「進路学習診断表」（抜粋）

将来への夢や希望を具体的にもっている
将来希望する職業と、高校で学んでいる内容を結びつけて考えることができる
将来の夢や希望を達成するために計画を立てて考えている

表3 「進路成熟尺度」（抜粋）

私は、生きがいのある生活を送りたいと思う
私は、自分の将来について、いろいろな計画を立てている
私は、これから先の進路をまだ決めていない
私は、自分の力で、自立した生き方をしたいと思う

表1、表2の2種類のアンケートによる実態調査を行い、各項目に関して生徒たちの関心度を5段階で評価し、実態調査や自己理解のための学級の雰囲気作りのための話し合いに活用した。

表4 「あるある性格分析」(テレビ番組より引用)

外向性	1	家より外で遊ぶほうが好き
(あなたは積極的?)	2	自分が忙切らないと気がすまない
	3	大勢でワイワイ騒ぐのが好き

表3の性格分析では、各項目に関して該当する頻度順に3段階で点数をつけてもらい、それをレーダーグラフ化し、お互いの性格を比較してもらう資料として活用した。全体計画中の「第2回検証授業」(生徒同士の模擬面接)において面接のグループ分けに役立った。

次に紹介する表の5と6は、毎年1月に行われる大学入試までの逆算カレンダーとなっている。ここでは、生徒が自身の就職試験や志望大学の入学試験の日程が書き込めるようにし、具体的な目標が立てられるように工夫した。

表5 「逆算カレンダー」

逆算カレンダー Oct 2001				
Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
1	2	3 模擬面	4	5
8	9	10	11	12
15	16	17 中間	18 中間	19 中間

この図には、教科別の目標が書き込める。それを別紙にまとめなおし、教科毎の目標を確認できる資料(図2)も用意し、進路ファイルに綴った。

表6 「お買い物リスト」(教科別学習計画表略図)

	6月	7月	8月
国語	古典文法の復習	現代文演習	

ここでは国語の例示にとどめる。これらは既製の計画表などを参考にして作成したものであり、進路ファイルに綴じて使用する。

(4) 本時の展開

段階	学習内容	学習活動		留意点
		生徒の活動	教師の活動	
導入	・講師(映画監督)の紹介 映画監督: 富田早志さん ・資料準備 (得点・感想記入用紙)	・これまでに作成した進路 個票などの資料を準備する。	・講師紹介 ・本日使用を予定している資料を開いてもらい、模擬面接の準備をさせる	・なぜ映画監督に講師を依頼したのかを説明する。 ・全員が模擬面接を受験するつもりで資料を確認させ、学級の雰囲気盛上げていく。
展開	・模擬面接 担任を含む面接官と、生徒の面接官を選出 ・(面接官の指名)	・座席移動 模擬面接受験生は教壇前に着席	・受験生の抽出 (希望者を募るが、これまで模擬面接で自己理解と表現力に優れた生徒も選出。)	・全員が上手だと認める生徒の模擬面接を行なうが、生徒による優しい質問と担任等によるイジワルな質問を行なう。



図1 「面接・小論文ニュース」

進路情報の発信の必要性から、また、指導の継続性を維持する必要性から、面接・小論文に関する意識付けを絶えず行うため不定期ではあるが、図1の「面接・小論文ニュース」を発行した。

3 検証授業

- (1) 日時 平成13年7月10日(火) 4校時
- (2) 題材名 『模擬面接と講演』
- (3) 題材設定の理由

面接に関する取り組みを確認することで、学期終了前に進路意識を高める。また、講演においては、人物観察の専門家の話を聞くことで、他者による自己理解を深めることができるよう動機付けを行うため。

(4) 指導目標

- ① 志願理由書を活かした模擬面接を行なう。
- ② 面接における自己理解と自己表現の重要性の認識を志願理由書に反映させる。
- ③ 人の表情や感情の表現の観察に秀でた映画監督に、人が人のことを知りたいと思ったとき顔や体のどこに注目するのかを話してもらう。

開	① 面接官（生徒）による面接	・模擬面接終了後の討議に向け、メモの作成 ⇒自分が質問されたらどう答えるか ⇒自分が面接官だったら何を聞くか	・グループ分けの指導と司会進行 ・生徒の質問中、机間指導をしながらメモの取り方、点数表のつけ方を指示	・イジワルな質問が生徒を傷つけないように気をつける。（例・ブラバシーに関わる質問や体の特徴などにおける欠点などに言及しない）
	 模擬面接受験生 ② 面接官（担任等）による面接 ・採点発表	・面接の採点	・映画監督、担任、副担任による面接（用紙の記入方法説明）	 映画監督を中心に質問を考えるグループ ・点数のつけ方が主観的になりすぎないように注意する。
まとめ	・本時のまとめ ・講演	・資料整理 ・聴講、メモ	・机間指導	・講演の内容を整理し、講師に質問ができるよう指導する。

(5) 検証授業の反省

検証授業において、生徒が各自の課題にどれくらい気づくか、また自己理解の不足、表現力の未熟さにどれだけの課題を見つけ出すのか予測を立てるのは困難であった。

検証授業終了後のアンケートの生徒の感想に手がかりを求めたが、そこに書き出された各自の課題は多種多様で、それこそ、検証項目すべてにわたって独自の課題を見つけ出している。

表7 「授業の感想」

A	少し進路が整理できたのでよかった。
B	自己表現、自分を知ることとはとても大切なことだ。でも、難しいことだと思った。
C	面接の練習を勇気をだしてやればよかった。
D	短い期間に視野が広がったような気がする。
E	面接官にこの子に勉強を教えたいと思わせる様に内面をみがいていかないといけないと思った。
F	自分の行きたい大学というのがあやふやになってしまい、不安になってきました。

Bさんの課題は、「自己理解に欠けていたもの」であり、それは「大学が求める人間像」を考えることで初めて発見することができた。また、多くの生徒が、Fさんのように「進みたい学部は決定している」ものの、「なぜこの大学を選んだのか」という問いには明確に答えられない状況がある。

これらの感想の多くは、模擬面接の受験生ではなく、面接官になった生徒や、審査員の役割をした生徒たちであった。

生徒一人一人が多くの課題を挙げられるようになったこと、そして友人同士が課題を持ち寄って話をするようになった学級の雰囲気や、授業の大きな成果と捉えることができる。

4 仮説の検証

第3回検証授業を終え、これまでの授業を振り返り、アンケートを実施した。生徒が各自で採点をするもので、感想なども付してある。4月に実施したアンケートと併せて研究の仮説を検証する。アンケートは、「非常によく当てはまる」を5点とし、「ほとんど当てはまらない」の1点まで、生徒が各自の姿勢・態度を省みて自己採点した結果であり、それを平均点で検証をする。検証の項目は以下の2項目である。

① 進路意識は高まったか

② 自己理解の深化と表現力の向上

(1) 進路意識の変容

次の質問項目の第1回目と2回目のアンケート結果を比較することにより、生徒の進路希望が定まってきたのか、あるいは進路意識が高まったのかを考察する。

表8 「第1回, 第2回アンケートの比較」

		第1回	第2回	増減
1	夢や希望を具体的に持っている	2.8	3.6	増
2	夢や希望を達成するために計画を立てて考えている	2.7	3.4	増
3	夢や希望を達成するために準備をしている	2.8	3.3	増

対象が第3学年の生徒であることから、時間の経過に伴う進路意識の高揚は当然である。が、この大きな数字の変化は、指導による変容であるとも言えるのではないだろうか。

面接練習、志願理由書の重要性、小論文対策の必要性などに気づき始めた生徒たちの意見が多く聞かれるようになったのは、1学期の終わりごろであり、「面接・小論文ニュース、読んでるよ」という生徒が増え始めた。生徒たちが「ニュース」の中身、つまり面接や小論文に関心を寄せていることが、下の表9の質問7の数字から読み取れる。全体の64%にあたる生徒が「ニュース」を読んでいるのである。

以上のことから、「面接・小論文に関する生徒の意識が高まってきたこと」と、「夢や希望を持つ」こと及びその「夢の実現にむけて」の具体的な取り組みが動き始めたことは、数字の上昇が一致していることから、相互に作用していると考えられる。

(2) 自己理解の深化と表現力の向上

表9 (第2回アンケート)

問	評 価 項 目	
1	話を聴く態度は良くなったか?	3.8
2	模擬面接で自己理解は深まったか?	3.5
3	模擬面接で表現力は豊かになったか?	3.1
4	進路ファイルを使って面接の練習はできているか?	2.6
5	進路ファイル・逆算カレンダーは記入してある?	1.7
6	進路ファイル・お買い物リストは記入してある?	1.8
7	進路ファイル・「面接・小論文ニュース」は読んでいる?	3.1

上のアンケート結果(問2)から、生徒たち自身が自己理解が深まったことを意識していることがわかる。

質問3の「表現力」に関する問いに対しては平均点が低いことから、「自己理解の深化」と「自己表現

力の向上」が結びついていない生徒がいると考えられる。

(4) 検証の結果

上記2項目に関する考察を重ねた結果、LHRにおける進路個票の作成とその指導及び模擬面接練習、志願理由書を中心とした小論文指導を通して、生徒の自己理解を深めることができた。

また、自己表現を奨励する場を設けることにより、各自の自己理解や表現力を考えさせ、課題発見の一助となったことで目標はほぼ達成できたと考える。

IV まとめと今後の課題

1 成果

模擬面接練習と志願理由書の作成指導を早期に始めたことで、生徒の自己理解が深化し、表現力が向上したことがアンケートの結果と感想から分かった。

(1) 生徒が各自の課題を発見したことは、「面接・小論文の指導」を早期に始めたことと因果関係があった。自己理解と表現力における課題発見の指導が、少なからずも生徒自らの進路意識を高めることにつながった。

(2) 模擬面接指導や小論文指導のための資料を個票ではなく、ファイルという形で集約したことは予想外の成果をもたらした。資料によって仲間との交流が活発化し、生徒同士での面接練習が可能となったため、表現力における課題の発見と解決を促進することができた。

2 課題

(1) 自己理解と表現力を育成する手立てとしての模擬面接・小論文指導を第2学年において実施し、課題発見と解決に向けての取り組みを充実させたい。

(2) 職場体験学習等の啓発的経験を生かせるような進路個票及びファイルの作成の方法を検討したい。その進路個票をデータベース化することが可能か、また、学校全体として取り組みや、中学校との連携の可能性等を検討したい。

<主な参考文献>

山口政志監修 1987 「進路指導実務辞典」 実務教育出版
平井 昌夫 1974 「文章評価法」 至文堂